UDLM

新年度はすぐそこに。
今年度の取り組みが、次年度への芽となっていますように。

△主担当が就活の面接終わりに見上げた空

3

vol.343

March 31th
2024

萌芽の候

p.2-5　マガジンジャック
p.6-8　刊行物デザインから見る
都市デザイン研プロジェクト

URBAN DESIGN LAB. MAGAZINE

M1 山田の マガジンジャック

ということで、大変勝手ながら、私自身の 2023 年度を振り返りつつ、特に印象深く皆さんに是非知っていただきたい活動をピックアップする。
概観すると、研究室のプロジェクトは宇治のみで、その他は今住んでいる地域や地元・岐阜県白川村での活動に時間を費やしたように思う。また、スタジオ演習、他メンバーの活動を見に行くことも楽しんだ。

「あなたはどうしたいの？」と聞かれるのが苦手だ。
「もっと自分勝手になればいいのに」と
ことあるごとに言われてきた。
意思がないわけではないが、色々考えた結果、
無意識のうちにブレーキがかかってしまう。

マガジンでも、とりあえず
「去年の同じ時期は何をやっていたかな」と考える。
「例年どうだったかな」を考える。

過去のマガジンを読んだ。
さかのぼればさかのぼるほど、研究室の先輩たちの、
気迫のこもった文章に心を打たれた。
先輩方自身の思いが乗った文章だと感じた。

全体での意味は何だろう。みんなにとってどうだろう。
この視点はもちろん重要なものではあるが、
これに縛られすぎていたような気がする。

この１年間、
私はまあまあ自分勝手に、好き放題過ごしてきた。
自分の中でターニングポイントになる１年だった。

このタイミングで、「私自身がどうしたいか」という
完全なエゴの下で、特集を組んでみたい。

貴重な年度末、３月号のマガジンを、
ジャックさせてもらうことにした。

4月 大学院入学
復興デザインスタジオ履修

5月 B3　設計演習 TA
上野　五條天神社例大祭

6月 PJ、宇治のみに専念
帰省①

7月 宇治　初訪問
S セメジュリー

8月 **帰省②**
流動商店 間借り出店

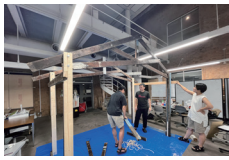
9月 **宇治 PJ　まちにわ WS**
研究室旅行 in 台湾

10月 **帰省③　どぶろく祭**

11月 **JUHLA FESTIVAL**
宇治 PJ　まちにわ WS

12月 **復興デザインコンペ参加**
津和野会議参加
帰省④

1月 A セメジュリー



2月 **帰省⑤**

3月 **FUJI Youth Camp 参加**

2 年半住んでるのに知らなかった、文京区千駄木

4 月・5 月と、やってみたいことはたくさんあるもののなかなか地に足をつけて取り組めずふらふらした日々を送っていた。
そんなある日、研究室から帰る途中、ずっと気になっていたがいつ開いているのかよくわからない店に明かりがついていて、そして人がいるのが見えた。思い切って入ってみたその店が文京区千駄木「Juhla tokyo」（ユフラトーキョー）だ。
実はこのお店、入ってから知ったのだが、研究室の大先輩である博士課程の三文字さんが経営する都市・建築設計事務所の「流動商店」がリノベーションの設計と施工をした場所であり、その日たまたま三文字さんもお店にいらっしゃった。その縁もあり、店主と仲良くなった。
ユフラを訪れる回数が増え、千駄木エリアに顔見知りが増えるだけでなく、様々な活動に誘っていただき地域と関わらせてもらうようになった。
2 年半住んでいたにもかかわらず、初めて「今」自分が住んでいる場所について考えることになったのだ。

Juhla tokyo 入り口の看板

岐阜県の郷土料理・ケイちゃん

流動商店 間借り出店

ユフラを訪れること 2 回目。店主にふと「いつかカウンター立ってみたいんですよね」という話をしたところ、「来週、流動商店で間借りして店出すけど、やる？」と声をかけていただいた。当時、流動商店が、研究室 OB の柄澤さんの管理するビル・bunkyo blanc1 階で飲食店を運営しており、定期的に間貸し営業していた（現在その場所には貫哲というお寿司やさんが入居している）。そしてたまたまその週、bunkyo blanc から歩いて 10 分ほどの距離にあるユフラが出店する予定だった、という経緯だ。
思ったより早くカウンターに立つという夢がかなうことに驚きつつも、東京にいながら地元と関わる方法について考えていた時だったので、「飛騨の郷土料理を出す」というコンセプトで誘いに乗らせていただくことに。
ちょうど帰省と重なったので、地元で食材を集めつつ、パンフレットも調達してなんとか場を作ることができた（ユフラ店主のご協力もとても大きかった）。研究室のメンバーをはじめ、15 名ほどが訪れてくれて、とても刺激的な経験となった。

訪れてくれた研究室メンバー

JUHLA FESTIVAL 展示物作成

Juhla tokyo の店主は、2018 年から音楽フェス「JUHLA FESTIVAL」を開催している。私も昨年度、たまたま通りかかって覗いていたイベントなので、ユフラが主催していることを知ったとき、また縁を感じていた。
ある日店主から連絡が来て、「地図、作らない？」というお誘いを受けた。ユフラフェスも開催回数を重ねる中で、地域との関わりももっともっと深めていきたい、という店主の想いからだ。
谷根千エリアで活動する HAGI STUDIO の方、そして（何度も登場するが）三文字さんの協力を得ながら、会場を訪れた人が各々のお気に入りの場所を描きこんでいくことで完成する「コマゴメセンゴクセンダギハクサンホンコマらへんの MAP（仮）」を作成、展示した。ふざけたタイトルの白紙の地図にもかかわらず、多くの方が描きこんでくださり、付箋であふれた。
月並みな感想になるが、普段、「何もない」と思って、上野やその他大きな街へ出てしまうことが多いこのエリアに、こんなにもたくさんの面白い場所があることが知られて純粋に楽しかった。この企画後、このマップにある店や場所を訪れ、あらたな魅力を発掘している。
現在、この地図をどのようにして次回以降の JUHLA FESTIVAL に活かしていくか、店主と相談中なので、乞うご期待！

掲示したマップ

参加者の書き込み

フェスの看板　会場養源寺を背に

Juhla Tokyo /
ユフラトーキョー
東京都文京区千駄木
5-38-9
https://juh.la/

合同会社
流動商店
東京都文京区千駄木
2-33-14 流動工房
https://ryudo
shoten.tokyo/

bunkyo
blanc
東京都文京区向丘
2-34-3
https://bunkyo
blanc.tokyo/

地元白川村で「なんかしたい」

大学院に入り、2 か月に 1 回のペースで帰省していた。
ハイペースで帰省するようになったきっかけは、6 月ごろ。
手賀沼・上野両 PJ に、迷った結果入るのをやめ、どんな地域と関わりたいかを考えていた。そして至った結論が、「地元のこと、考えなくていいのだろうか」。たまたま同じタイミングで幼馴染からも「白川でイベントやらない？」と連絡がきて、地元とたくさん関わろうという思いが強くなった。

一番印象に残っているのは、10 月の帰省だ。
新型コロナウイルスの影響で 2020 年以来開催できていなかった、天下の奇祭・どぶろく祭りに参加した。私自身は、高校 1 年生以来、7 年ぶりの祭りだった。祭りのために 1 年間地域みんなで準備をしてきて、「疲れるわあ」と言いながら結局六日六晩どぶろくを飲み歩く村の人の姿がとても懐かしかった。そして獅子舞や民謡の歌が流れればおのずと体が動き出す。自分の中に白川村の文化がしっかり残っていることを強く認識した。

なお、「イベントやらない？」という話は続いている。
幼馴染だけでなく、白川村と関わりたいと思っている村外の学生たちも巻き込み、有志でチームを組んで企画中だ。
「世界遺産があるからと言ってちょっと胡坐をかいていないか？」
「これからの村はだれが担うのか？」
「世代間の価値観の違いはどうしたら揃えていけるのか？」
「今いる子どもたちと一緒に将来を考えるきっかけを作れないか？」
このような問いと向き合いながら、第一歩として、子どもたちと一緒につくるマルシェを企画している。6/15、ご都合の合う方はぜひ白川郷へ。

6 月の帰省時、梅雨時の白川郷

祭で振舞われるどぶろくと獅子舞

悔いの残る宇治 PJ

宇治 PJ への関わり方は、1 年間の自分の中で最も悔いる部分が大きい。
私が唯一参加している研究室の PJ であるが、その割に主体性のかけらもない取り組み方をしてしまったように思う。今年度からの参加が自分だけ、かつとても優秀なメンバーに囲まれる中で、「指導してもらう立場」という認識になりすぎていた。
とはいえ、PJ に参加することで、自分個人として関わるのとは違う、地域との関わり方を知ることができたのはとても大きい。私は 2023 年の夏に初めてしっかり宇治を訪れた。一個人の活動では、馴染みのない地域で、いきなり地域の方と関わり、行政の方とも協働し、ワークショップを企画する、ということはかなり難しいだろう。当たり前のように役割を持たせてもらい、地域の方に受け入れられ信頼していただけることの背景には、研究室としてそれまで誠実に地域に向き合ってきたことの蓄積があるということを実感した。だからこそ、研究室の PJ であることによる制約や慣例を言い訳にして作業として取り組むのではなく、もっと追求すべきだったという後悔が残るのだ。来年度はもっと堂々と宇治 PJ について語れるようになっていたい。

11 月　まちにわ WS 参加者の集合写真

長かった復興デザイン

S セメで履修した復興デザインスタジオ。履修登録の時は、まさか 12 月まで活動が続くとは思っていなかった。
今年の復興デザインスタジオのテーマは、来る首都直下地震に備える事前復興計画、「東京計画 2050」の提案だ。私たちは墨田区を対象として、町工場のものづくりマインドを活用した「モノヅクリバイバル」なるものを提案し S セメを終えたのだが、「社会接続演習」の名の下、夏休み、そして A セメと授業が続いていた。そしてなんとなく、復興デザインコンペに応募することに。最終審査では、実際にコンペの会場で小屋を建てるという荒業が評価され、なんと最優秀賞をいただいた。私にとって初めてのコンペでの受賞となった上、同年代の他の応募者の発表もとても刺激になった。
しかし、1 月 1 日、能登半島沖地震。テレビで流れる、通ったことのある場所の惨状を目にし、「災害時に自分たちで小屋を建てる」なんていう自分たちの提案は何も意味をなさないのではないか、という思いに駆られた。このような思考を続けるだけでなく、実践に落としていくことを通して初めて、復興デザインスタジオをとった意味があるのだと考えている。

コンペ最終審査で建てた小屋

研究室メンバーのまちへ

上野 PJ　池のほとりの本のみち

上野 PJ は抜けてしまったが、上野はよく訪れており、普段自転車で通り過ぎている道路に本の屋台が並ぶというこのイベントはとても興味深かった。天気にも恵まれ、多くの人が行きかっている様子に心が踊った。
今年度、他 PJ の活動に参加できたのはこれのみだった。PJ のうちみなかみだけまだ訪れたことがないので、来年度は是非訪れたい。

津和野会議

B4 の鈴木さんが、高校時代を過ごした島根県津和野町で企画した津和野会議に参加した。若者世代を中心としつつ、様々な分野の専門家・研究者、その他多様な背景を持つ人たちで、地域の課題について議論しあうというイベントだ。外から来て津和野と関わっている人たちがこんなにもいるということに衝撃を覚えた。地域内外の人を繋ぐというのは私の地元の将来を考えるうえでの課題でもあり、今の白川村での活動にも活かされていると感じる。

FUJI Youth Camp

富士吉田 PJ に参加しながら、富士吉田市の地域おこし協力隊を務めていた M2 の伊藤さんが企画したイベント。1 年間の活動の集大成として、ほぼ 1 人で企画し、30 名近くの参加者を集めた伊藤さんの行動力と人柄に純粋に感動した。ちなみに私は初めてしっかり富士山を見るということで、イベント後 M2 佐橋さんと一緒に案内していただいたのもいい思い出だ。

研究室のメンバーそれぞれの、故郷以外の「自分のまち」を訪れることで、単純な旅行先などではなくより踏み込んで関わることのできる地域が増えるような気がしている。一方で、このような「飛び入り参加」をすることがどのくらい地域にとって意味を持つのかは正直分からない。しかし少なくとも私にとっては、研究室の同志たちがどんな思いをもって様々な地域に関わっているのかを知ることは、自分を見直す機会になっている。それを踏まえ、単に参加し自分の中でかみ砕くだけでなく、各々の活動で感じていることを率直に話し合える関係性を築いていきたいと思う。

津和野の街並み

上野 PJ 社会実験の看板

富士吉田 新倉山浅間公園にて

最後に

当初、3 月号では「デザ研のプロジェクトのその後」をテーマにしようとしていたのだが、過去のマガジンを振り返ったところ既に同じようなテーマで何度も特集されていたため、一旦断念した。
しかし、その過程で中島教授・永野助教にお話を伺ったことは自分の研究室への取り組み方を考え直す貴重な時間となった。「これからの PJ について」という話題はぜひ皆さんと共有したいので掲載する。

先生方もおっしゃるように、過去のマガジンで何度も、PJ と研究室の在り方について問われてきている。一朝一夕で解決することではないが、少しでも前に進めることを考えたい。私自身も、この 1 年研究とは距離を置いてしまっていたので、2024 年度の建築学会には行こうと決めた（発表はしないのだが…）。東京都開催なので、皆さんも是非。

中島先生
「それぞれの PJ がそれぞれの地域で特殊解を出そうとしている。もちろんあまねく適用できるものばかりではないが、**方法や技術の蓄積をしていかなければならない**。研究室内部で受け継がれるものとして、もう少し整理されたらいい。他の PJ との横のつながりというのも含めて。**また、研究室主導型の PJ はもう少しあってもいいかな。**誰かがテーマをもって、実践する、調査するということが最近少なくなっている。お願いされて受けるのも大事だししっかりやるべきだが、『**これからの時代、こういうのが大事だよ』というメッセージを発信するような取り組み方**もしたい。」

永野先生
「PJ で扱っている固定テーマや空間類型について、**都市デザインの中のどういうポジションでやっているのか自覚的にならないといけない**。それがなければ、『頼まれてただやりました』ということになってしまう。デザインでもワークショップ的なものでも、**都市デザイン的な最先端に挑みたいなという思いをもって議論しあう時間を取らなければいけない**。学生間でも、教員と飲みに行きながらでも。」

中島先生
「建築学会とか出した方がいい。出すときに、自分たちの PJ の報告ってどういう意味があるのだろうかと考える。」

永野先生
「学会で他の人の発表を聞くだけでも意味がある。**他と比べながら考えるということは PJ でも研究でも同じ**。その視点で話すと、PJ から論文を書く人が少ない。各 PJ から 1 人ずつくらいしかいないのは痛いところ…。」

中島先生
「PJ のフェーズとして、調査・分析から実践に移っているところが多いから、PJ の内容が自分が研究で扱いたいテーマであるとは限らないのかも。あるいは、PJ が年数を重ねる中で、自分で考えなくてもテーマがある、という状態になっているのも関係ありそう。ただ、他大学の研究室では必ず PJ を研究で扱うと決められているところもあるくらいだから、**研究とつなげることは大事**。でもこの話もかつてのマガジンで話してるんだよね（笑）」

刊行物デザインから見る都市デザイン研プロジェクト

今年度も都市デザイン研では各プロジェクトで社会実験や各種ワークショップ、住民説明等様々な活動を行ってきたとともに、こうした種々の活動はフライヤーや提案書といった刊行物を通じて発信されてきた。

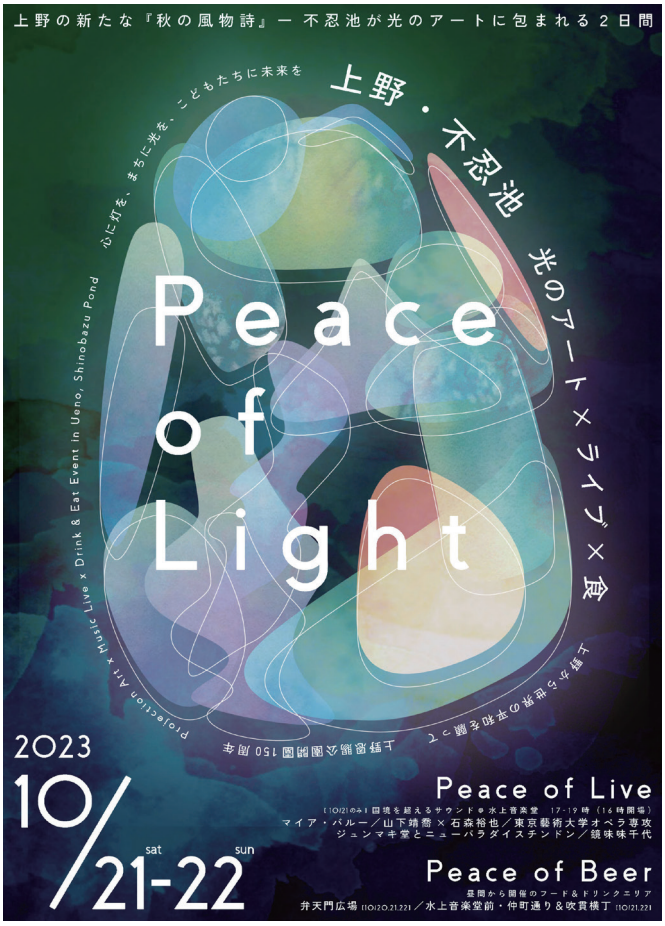
ここでは、その対外向けの刊行物から本年のプロジェクトを振り返るとともに、その紙面デザインの特徴とプロジェクト活動のテーマやコンセプトとの関連性についても考察してみる。

上野プロジェクト

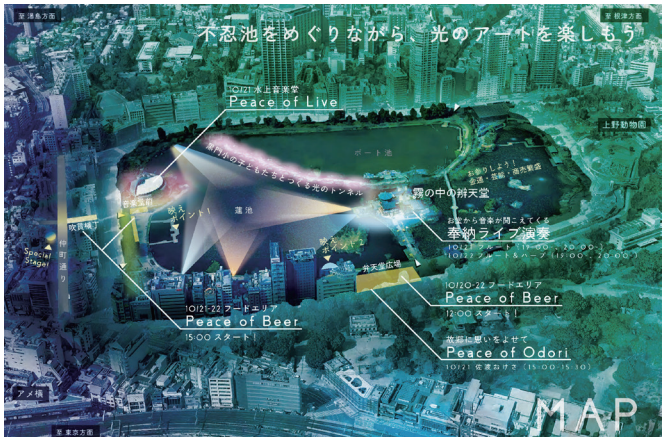
キャッチーかつテーマ重視のデザイン

上野 PJ では本年度対外向けの活動として「Peace of Light」と「日替りブックカフェ」を敢行した。フライヤーデザインを見るとまずそれぞれのイベントのテーマに沿ってデザインテイストがガラリと違うのが見て取れる。

ブックカフェでは不忍池と辯天堂が目立つのどかなイラストが前面に押し出され、Peace of Light は光を基調とした幻想的な紙面デザインとなっている。



2023.10「Peace of Light」フライヤー



2023.10「池のほとりの本のみち」フライヤー

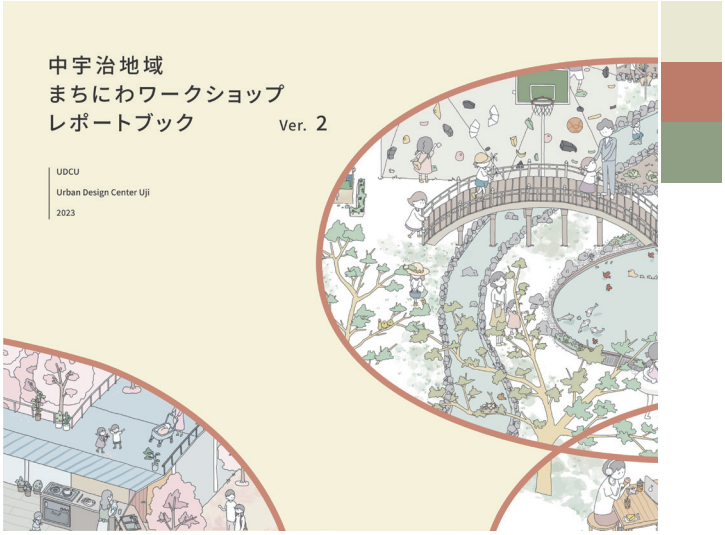
2023.11「三角広場ブックカフェ」フライヤー

宇治プロジェクト

1 枚絵の切り抜きと回ごとの「色」

宇治 PJ の「まちにわ WS」は中宇治のまちにわを地域住民に実際に利用してもらう協働型の社会実験。そのフライヤーやレポートブックには、地域の「にわ」となる場に人々が集い様々な活動を行う絵が大きく描かれており、中宇治の将来像を構想したデザインとなっている。

またこれら刊行物は過去 3 年にわたって製作されているが、版ごとにベースとなる色が設定されている。統一的なデザインとカラーバリエーションから活動の変遷も読み取ることができる。



2023.03「まちにわワークショップ」コンセプトブック

2023.09「まちにわワークショップ」フライヤー

富士吉田プロジェクト

「場と移動」をコンセプトとしたイラストデザイン

富士吉田 PJ では近年駅と観光地をつなぐ下吉田のまちやみちを滞留と移動の溢れる場にすることをテーマに、今年度も各種社会実験を開催した。そうしたまちなかの「場と移動」を主眼としたコンセプトが社会実験のフライヤーイラストからも読み取ることができる。

「ヒモトキ」の社会実験は昨年度に引き続き 2 年目であり、その特徴的なネーミングとフォント等デザインがフライヤーに一貫した物語性を生み出している点も特徴。

2023.06「ヒモトキ・ミチオリ号」フライヤー

2023.11「ヒモトキ・マチノリ」フライヤー

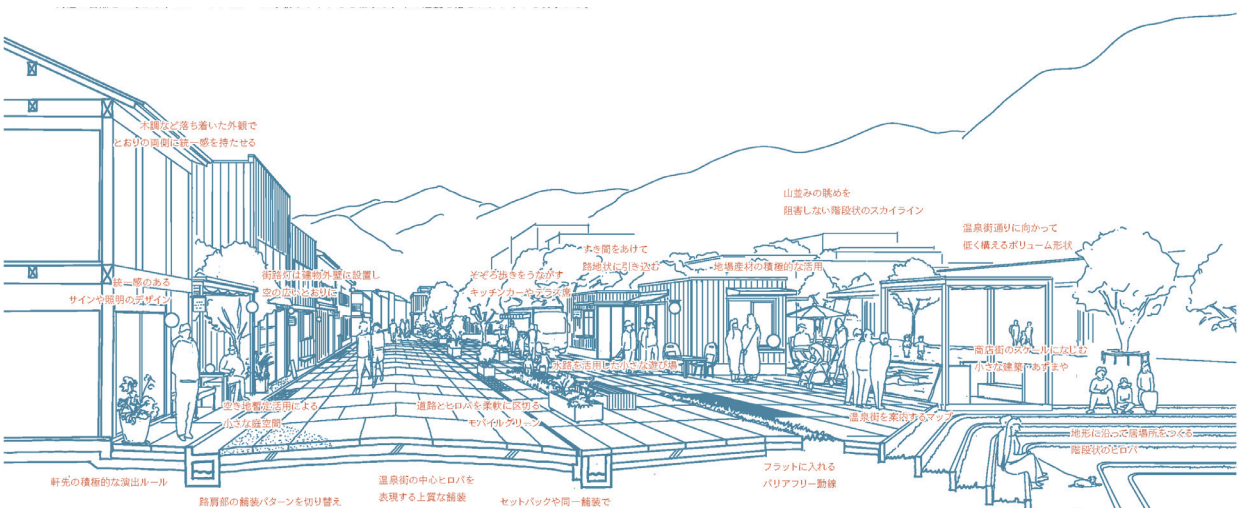
みなかみプロジェクト

廃墟の温泉街の再生を目的として一昨年より発足したみなかみ PJ。現在は開発にあたってのエリアコンセプト提案や旧ひがき寮でのマルシェ開催などの活動を行っている。

「青」を基調としたパースやロゴデザイン

エリアコンセプトブックは青を基調としたカラーデザインで構成されている。その工夫は各所の青一色による断面図やパースにも現れており、どことなく「タナパー」を連想させる。このカラーチョイスは他のフライヤーにも共通して見られる。

「廃墟再生プロジェクト」のロゴデザインも青マルに特徴的なフォントでおおむね統一されており、展示会のフライヤーでも同様の形式が採用され一体感を生み出している。



2023.12「旧『一葉亭』・水上温泉街エリア コンセプトブック・アイディア集」

2023.10「廃墟再生マルシェ」フライヤー

2023.12「廃墟再生プロジェクト展 2023」フライヤー

COLUMN

POSTSCRIPT

M2・B4 のみなさん、修了・卒業おめでとうございます！あっという間に 3 月末ですね。毎年 1 年間のプロジェクトの振り返りをしている 3 月号をとても私的に使ってしまいすみません。皆さんの 2023 年度も聞けると嬉しいです。ぜひ感想フォームで教えてください。各プロジェクトの取り組みは、4 月のプロジェクト報告会で存分に発表されると信じています！

3 月号担当
M1 山田真帆

WEB MAGAZINE

続きはコチラ >>>
https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

#富士吉田プロジェクト

富士吉田市で地域おこし協力隊をやっている M2 伊藤さんが主催したイベント。普段の研究室プロジェクトではあまり関わらない方々のお話を聞いたり、将来像を考えたりする良い機会になりました。（M1 東條）

修了生追いコン

デザ研を修了される M2 の追いコンを開催。プレゼントや PJ の方々からのメッセージを通してお互いの感謝の気持ちを贈り合いました。来月から社会人、新たなフィールドでの活躍を応援しています！（M2 音山）

BOOK OF THE MONTH

東京の創発的アーバニズム

ホルヘ・アルマザン
+Studiolab
学芸出版社
2022

再開発によりビルの森と化す東京では、街の強さと引き換えに人の活気が失われている。しかし、その隙間や足元には、横丁・高架下・低層密集地域など、小さいながら活気溢れる東京が残されている。これからの再開発の在り方を考えさせてくれる一冊でした。（M1 水野）

URBAN DESIGN LAB. MAGAZINE | vol.343

発行：東京大学都市デザイン研究室マガジン編集部
平野真帆・伊藤純也・佐橋慶祐・高野楓己・橘俊輔・永井鷹一郎・長谷川帆奈・森屋友佑
音山尚大・小林夏月・洲崎玉代・水野謙吾・元吉千遥・山田真帆・東條秀祐

発行日：2024 年 3 月 31 日